BLUE SOCKS 2020
特集

VOL.2

誰もが日本一を目指した！ブルーソックス の原点、発足当時のイズムを
21年前に決行したカナダ遠征から色褪せない今を振り返る。

BATTLE in CANADA より 1998.10

カナダ遠征

BLUE SOCKS
1998
コーチ
亀龍俊一
COACH

2020 BLUE SOCKS INTERVIEW
テーマ・・・若者へ。夢を見なければ、その夢は叶わない

ブルーソックスは日本一を目指し、埼玉県（当時 70 チーム）では最下位から 2 位まで進出した時期。カナダ遠征の話が持ち上がり賛否両論の中、監督からの「昨日と同じことをしていては明日はない。」にメンバーが感銘を受け、私もカナダ遠征に尽力した。
最初半数以下だったメンバーも意気に感じたのか、決行する頃には約 40 名まで膨れ上がり、いよいよカナダへの遠征を果たす。
日本一という夢を見なければ、その夢は叶わない・・・良い意味で馬鹿になりきれるメンバーの集まりで、一枚岩になる事こそが我がブルーソックスの強さであり、真骨頂である。
私は当時コーチという立場でしたが、決して偉ぶる気はなく、メンバーと共にコーチという立場だからこそできる意見や発想をチームに投げかけてきた。
当時、共に日本一を目指すメンバーとの毎日が楽しく、しばしば深夜までミーティングをする事もあった。
カナダ遠征は私たちにとって、サイズ・腕力・技術・・・全くの未知数であり挑戦であり、ビハインドの試合は埼玉県でも常に想定された。カナダ遠征はこれを払拭するとてもいいチャンスだと私は思った。
現実にこのカナダ遠征では優勝は逃したものの、初出場で 3 位という成績を残し、メンバーの自信に大きく繋がったと感じた遠征であった。
最後に、その翌年 1999 年我がブルーソックスは埼玉県で念願の優勝を果たす事になった。それはこのカナダ遠征の「自信」が大きく影響していると思っている。

BLUE SOCKS
1998
フォワードリーダー
亀龍信二
FW Leader

2020 BLUE SOCKS INTERVIEW
テーマ・・・若者へ。いつでも信じる力を持っていれば、明日は開ける。

当時のキャプテンが突然仕事の都合でキャプテンを降りると言い出した・・・。当時のブルーソックス にとっては大事件であり、監督も「こんなバラバラなチームでは存続は難しい。」とチームにピリオドを打つ寸前の出来事・・・。
「自分がキャプテンをやりますよ！」と檄を飛ばしたのは、入部間もない伊藤浩司である。彼は高校時代に「日本一」を目指せる高校でレギュラーでプレイしてきたにも関わらず、その時に大きな忘れ物をしていた・・・。
その言葉を聞いた亀龍信二は、この先彼を本物のキャプテンにする立役者になる事を誓う。彼を「信頼」という絆でチームの中心に押し上げる為にカナダ遠征で、亀龍信二が影に日向に動き続けていたのである。
カナダ遠征の話が持ち上がったのは、まさにそんな時期の事だった。
みんなが無理だよと思う中、彼が思ったのは日本一を目指すチームが、目の前の「無理かもしれない・・・」に対して尻込みしてしまう普通のチームでは到底日本一なんかにはなれない！！
自分は日本一を目指すチームの中心メンバーの一人であり、カナダ遠征など今後いろいろな困難な壁を破り突破する上で一つの障害でしかない・・・
とにかくこの遠征で、メンバー間で「信頼を築く為に一つになる事」を掲げ、みんなでカナダ遠征を果たす。言ってみれば「日本一になることは無理ではない」をきっかけを作る。
そして、日本一を目指す礎になればいい・・・そんな気持ちで当時、自分には首と腰にヘルニアを持ち、遠征でもできる事はそんなには多くはないが、それでも満身創痍だった身体を突き動かしたそうだ。
困難を共に乗り越えられる「信頼」できる仲間がいる。それが「ブルーソックス の絶対的な強さ」である・・・
結果。参加メンバーはほとんど参加し約 40 名。カナダでは優勝は逃したものの、みんなが自信をつけて日本一を目指す為の礎作りができたと思う。

バトルインカナダ

カナダでブルーソックス を待ち受けていたのは、今年で 25 年目を数えるモントリオール国際クラブ大会。この大会は、カナダの勤労感謝の日を期限にして行われる伝統的な大会で、今年はカナダのほか、イギリス、アメリカ、イギリス領バミューダ、そしてアジア初参戦の日本から計 8 チームで行われた。
大会は 2 日間にわたって開催され、カナダの広大な自然の中で 2 面のグランドを同時進行で進み、また国営放送も取材に訪れ、亀龍俊一コーチがインタビューを受けていた。
ブルーソックスは、1 日目まず初戦でホストチーム、モントリオールアイリッシュと対戦。相手の 190cm、スタンドオフのキック攻撃に苦しみながらも「神風タックル」で対抗、優勝候補筆頭を 17 対 5 で下す好発進。
2 戦目はセントフォアクラブ（カナダ）と対戦。ブルーソックスは、相手が結成 3 年目の若いチームとあって優位にゲームを進め、後半ワントライを献上しながらも17対7で降り切り連勝。そして初日の最終ゲーム。前2試合で疲労のピークにあったブルーソックスは、南アの州代表を数名要するマサチューセッツ工科大（アメリカ）に逆転負けを喫した。(12 対 13 A リーグ 2 勝 1 敗で決勝トーナメントを迎えた進出)。
開けて大会 2 日目。ブルーソックスは、大会初日、ぶっちぎりの 3 連勝被ったバミューダレネゲイドと対戦。しかし、インターナショナルの選手主体で、大会 V にも輝いたレネゲイツとの現実の差はいかんともし難く、世界を痛感させられた（0 対 38）。大会 2 日目、第一試合となったこのゲームには数多くの観客が詰めかけた。なぜならば、初日、日本代表でも苦戦するのでは？と思わせるほどのフォワードのパワーで、対戦相手を蹂躙し続けたレネゲイツの戦いぶりに、観客の視線が集まってからある。
だが、試合が進むにつれブルーソックスが、足首に突き刺さるタックルで対抗し出すと、レネゲイツはなりふり構わず、荒っぽいプレーで真剣勝負を読んできた。
このギリギリの状態での真剣勝負こそが、ブルーソックスにとってはこの遠征での 1 番の収穫であった。事実日本に帰ってきてからの 1 発目の試合で今まで見たことのないようなドライビングモール（亀龍監督）からトライを奪うという成果を見せた。
それと同時に、ブルーソックスの健闘ぶりは、レネゲイツとの 1 戦での観客の反応ぶりが如実に物語っていた。というのも、ゲームの序盤はレネゲイツの猛攻に喝采を浴びせていた観客たちも、アジアから来た小さな侍たちの熱いスピリットに感銘を受けたのか、後半の半ば過ぎにはほとんどのものが「カモン、ブルーソックス！」と声を張り上げ、タッチラインギリギリまで押し寄せるほどだったからである。

その魂、ある限り

選手個々で見ても、成果は十分にあった。フォワードではブルーソックスの叩き上げたプロップ熊谷に、常に 120%を出し切ったフランカー佐山の活躍。バックスは、スクラムハーフ吉田、松浦・内藤のセンター陣の奮闘ぶりはまさに収穫といえよう。フルバック木戸の安定感も秀逸だった。
そして忘れてはならないのが、ブルーソックス、スピリッツの体現者、ナンバーエイト亀龍信二。怪我で状態が万全ではなかったため 2 試合にとどまったが、その 2 試合とも小さな体で他の 14 名に魂を注入し続けた。こういう選手がいる限り、ブルーソックスにはさらなる飛躍が約束されるだろう。
最後に、ツアーコンダクターとして、そして選手としても存分に走りまわったロック中川紀章氏 (茗渓学園＝青学大〜元 JTB ラグビー部主将）を始め、3 名の女子マネージャー他スタッフの存在も忘れてはならない。2 日間で 4 試合と言う超過酷なスケジュールながらこのカナダ遠征は今後のブルーソックスの礎となるはず。時を同じくして日本では埼玉最大のライバル、Over The Top が東日本クラブ選手権 2 回戦で勝利を収めていた。果たして来年はいかに。ブルーソックスの戦士たちは世界最先端を胸に帰国の途に着いた。